

子育て支援の広がりとお～2歳児の家庭教育

～40年の親子教室実践の知見から～

中野由美子 (目白大学大学院講師・日立教育振興財団家庭教育研究所教育委員)

0～2歳児の親の子育ての現状

子ども・子育て支援関連3法が2012年に成立し、2015年度から「子ども・子育て支援新制度」が始まる。新制度の目的は、幼稚園・保育所・こども園などの統合と待機児対策としての施設型保育の多様化と地域型保育施設の新設である。

子育て支援事業の広がりとともに、少子化にもかかわらずこの10年、1,2歳児の保育所入所希望が著しく増加しており、待機児の8割が3歳未満児である。(図1) 常勤職は約20%で多くはパート・アルバイトであるが、母親の就労割合は0歳児の35%、1歳児の46%、2歳児の49%、3歳児の51%、4歳児を超えると60%を超える。10年前と比べると、3歳未満児の母親の就労率は約15%上昇しており、子どもの年齢が低くても就労する母親が増加している。(図2) 原則8時間の保育時間は11時間になり、延長保育実施園も多い。低年齢からの長時間の施設保育によって親の子育て負担は軽減されるが、同時に親の養育力や親子関係を深める機会が減少し、家庭で親子が育つ時間と環境は失われていく。

その一方で、第一子出産後に60%の母親が離職し育児に専念する。その理由は、育児に専念したい、両立困難、体調不良などであるが、「三つ子の魂百まで」「三歳児神話」などの価値観の影響も大きい。しかし、専業母親たちは親子の時間を楽しんでいるわけでもない。地域子育て拠点の利用者である育休中・家庭保育中の親に実施した意識調査では、子どもへの対応やしつけの仕方が未熟である、他人からの子育て評価が気

になる、子どもの育ちに不安があると答える一方で、毎日の母子だけの生活はつらい、気晴らしやママ友作りに外出したい、子どもを預ける機会がほしい、子どもの生活リズムよりも親の生活やペースを優先してしまうと感じている。この傾向は若い親、育休中の親、第一子の親に多い傾向があった。(中野 2013)

親準備体験が困難な環境に育った親の子育て

地域の絆の希薄化や少子化によって、近所や家庭内で乳幼児との接触や世話する体験が減少してほぼ30年、身近な環境の中で次世代が親準備体験をすることは困難になり、半数の母親は自分の子育てが初体験となりつつある。

原田は、乳幼児をもつ母親の接触体験・育児体験に関して、23年間(1880年と2003年)で比較しているが、母親たちの育ちの時代的变化がよく分かる。「子どもとの接触体験がなかった」母親は、2時点で15%→27%へと12%増え、「よくあった」母親は42%→32%へと10%減っていた。子どもの世話に関する「育児体験がなかった」母親は41%→55%へと14%増加し、「よくあった」母親は22%→18%へと減少していた。親準備体験が乏しいまま親役割を果たす親たちは、幼子が発する言葉以外の様々なサインの理解に不慣れで適切な対処ができず、不安やイライラ・負担感を募らせる。体験不足から育児情報に依存しようとするが、現実のわが子と情報が与える子どもとのギャップからかえって戸惑い、自信を失って不安やストレスを増加させる母親も多い。(原田 2006)

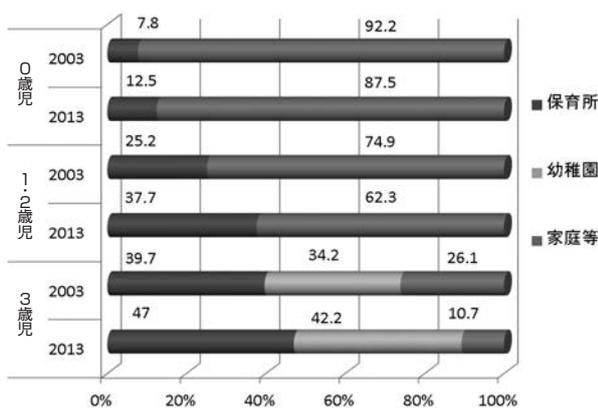


図1: 就学前児童の保育状況 保育白書 2014 から抜粋

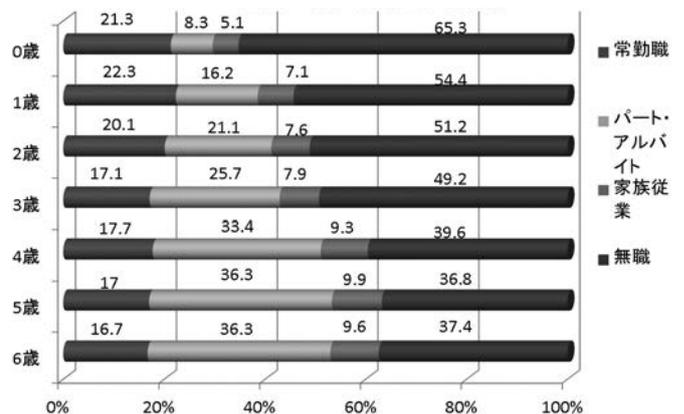


図2: 末子年齢別母親の就労状況 (2013) 国民生活基礎調査より作成

生活スタイルの多様化や子育て意識の変化によって、母親たちは子育てだけではない人生を描き始めている。就労の有無にかかわらず親の生活が忙しくなるほど、乳幼児が育つ生物としてのリズムに合わせることは親に努力や我慢を強いることも多い。親準備体験が乏しい親は子育てに苦手意識をもち、自分は親に向いていないと感じ、その結果、子育てを楽しめずに子どもから離れたい、あるいは親の都合や欲求を優先させて子どもを従わせようとする不適切な養育につながることもある。1980年から10年ごとに実施している乳幼児の親の調査結果によると、1～2歳児の母親の80%は「子どもとゆっくりと過ごせる時間がある」が、25%の母親が感情的な言葉で怒鳴る、叩くなどの体罰、しつけのし過ぎなどを挙げ、「子どもを虐待しているのではないかと虐待不安をもち、半数以上が「育児に自信があるとはいえない」状況にあるという。

親準備体験の不足は、親の子育て知識やスキル不足から無意識のうちに親の一方的なペースや欲求を優先させ、子どもの発達や自立を混乱させやすい。乳幼児期に達成が望まれる発達課題には、心の発達に不可欠な関係性の発達と生活リズムの自律にかかわる生活習慣の獲得があるが、いずれも大人の適切な援助を得なければ獲得されない課題である。

関係性の発達課題は、生後3か月までに外界刺激の受信器である身体・五感に快い身体接触や感覚的刺激を得て、表情や目線などの非言語的関わり的手段を獲得すること、6か月までに新奇刺激を楽しむ関わりや感覚を身につけ、大人から守られ受け入れられる安心の感覚を体得すること、1歳3か月までに愛着行動を試しながらまるごと受け止められる体験をして、大人への信頼感を得ること、2歳半ころまでには大人に代弁してもらいつつ、経験した感情や欲求、行動を言語化し伝達する力を養うこと、4歳半ころまでには言葉やイメージを使って友達との二人関係を、6歳までには対等な三人友達関係を安定させることである。こうした一連の課題の積み重ねが、集団生活への適応と学習や課題への取り組み、親からの分離を可能にする。最近注目される気になる子や小1プロブレムもこの発達課題と無関係ではない。

もう一つの発達課題である生活習慣のしつけも子どもの心身の成熟に沿った大人からの適切な援助が必要だが、親の都合や価値観の影響がみられる。1～2歳児の生活習慣を20～30年前と比較すると、遅くなった習慣には子どもの睡眠時刻と排泄のしつけ開始時期があり、親の夜型生活リズムと紙おむつの普及による影響がみられる。逆に早期化した習慣にはメディア接触と習い事があり、0歳からのメディア接触は年齢にかかわらず2時間を超え、1歳児の6%、2歳児の

31%が習い事（水泳・音楽・英会話など）をしている現状である。（日本小児保健協会 2010）

0～2歳の親子への子育て支援

1) 親性の発達支援こそ最大の子育て支援

親準備性・親性の発達が困難な時代に育った乳幼児の親たちが、親子が関わる時間を減らす子育てを志向するとき、親が家庭で行う緊密なかかわりは減少し、子どもが発達に必要な関わりや世話を乳幼児体験として親から受け取る機会は少なくなる。それが、前言語期の子どもへの無理解や不安定な親子関係、不適切な養育につながり、将来の親子の不利益につながる懸念もある。

新米の親たちが家庭保育を選ぶ割合が高い0～2歳の時期だからこそ、親子が一緒に参加し共に学ぶ体験的学びの場が身近な所に必要である。その「親子参加型支援」の場で大勢の中でわが子の姿を見る体験が子ども理解を深め、多様な親との関わりが親自身の養育力を高め、子育て自信につながっていく。早期に親子で学びを共有する体験は親子を育て、孤立と不安感を軽減する効果がある。

こうした取り組みの事例として、企業の教育振興事業が40年にわたり取り組んできた親子同時参加による親子教室の実践を紹介してみたい。（図3）

2) 親子同時支援の教室実践からの知見

— 家庭教育研究所 40年の取り組みから —

財) 日立教育振興財団の親子教室は日本の子育て支援事業が始まる10年以上前の1974年に発足し、40年間にわたり2か所で1万組を超える家族が参加してきた。当初の修了生は親世代になっている。

当財団の事業は、母子の自立を妨げる家庭の孤立や母子密着が社会的な問題になった1970年代、「子育ては親教育から」という理念で附属幼児教室をもつ親教

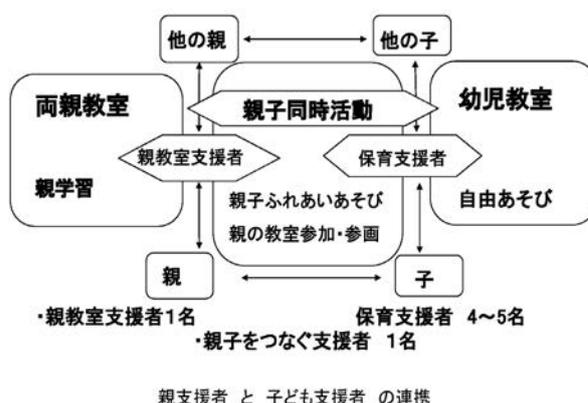


図3：親子教室の形態・支援者

室として出発した。少子化の90年代からは、親準備性・親性の発達が困難な時代に育った親が増加したために、親の養育力向上と親子の関係性支援、子どもの発達支援へと重点を移し、少子化時代の子どもの健全な発達と親子関係を予防的に支援する「親子同時支援」が中心になってきた。

当財団の親子教室の活動内容は以下である。

- ①親子同時参加による体験的学びの場（保育場面を活用した親が子どもの発達を体験的に学ぶ場）
- ②親子の交流・相互学習・親学習の場（子育て当事者親子がつながり・育ち合い・共に学ぶ場）
- ③保育をとおしての子どもの発達支援と親子関係性支援（親子双方に対する保育者・スタッフによる発達支援・相談・助言）
- ④地域の育児力を育み、次世代に繋ぐ場（子育て支援者の応援・地域子育てネットワークづくり応援）
- ⑤親子支援の場から研究・知見を発信する社会貢献活動（実践・研究・教育・出版活動の循環による成果の発信）

両親教室の体験的学びのプログラムは、保育の場に参加して子どもへの理解を深めながら親子の関わり方を見直し、親たちが身近な体験や親自身の子育ての姿を材料にして養育態度や価値観についての気づきを深

め、親役割や家族関係の調整の仕方を学ぶことによって、乳幼児期の子育てが将来の親子の成長を見通した生涯教育の学びとなるように構成されている。（図4）

親子同時支援者としてのファシリテーターと保育者の意思の疎通も大事であるが、共同で行う支援の効果は大きい。両者の共通支援役割は、①共感的役割（親子が自分をさらけ出せる安心できる場の設定と共感的関わり）②つなぐ役割（大勢の親子の関係をつなぐ関わり）である。加えて、保育者の役割としては③保育発達支援（遊びを通しての子どもの発達支援）があり、親教室のファシリテーターとしては④体験的学びのプログラム作りとその実施、ならびに⑤親子関係調整支援がある。（図5）親子を同時に支援する人は、スタッフだけではない。教室に参加する親も互に学び合い支援しあい、保育に参加し、親としての養育力向上を目指す。同時に、後輩や地域の親の支援者にふさわしい支援力を身につけ、PTAや地域の子育てグループの担い手に育っていくことも珍しくない。

体験的学びのプロセスは、親役割の代替でも指導や助言によるものではない。参加者が互いの体験を出し合い突合せて比較・検討することによって、現状に気づいて新しい方略を考え、他の親やスタッフの支援をえて実践しながら学びを高めていく自己学習過程である。親の気づきや関わり方の変化が親子関係を変え、子どもの育ちを変えていく。その手ごたえが子育てを楽しくさせ、親の養育力向上に自信をもたせる結果につながる。（図6）

このような親子同時支援によって、親の自尊心が高まり、家族・親子関係が確かなものになり、子育てを生涯学習の視野で考えられるような親の成長が可能になる。同時に子どもは、身体感覚を磨いて情緒が育ち、親との信頼感が深まり、大人の援助で言葉による自己表現力を豊かにしながら安定した二人の友達関係を築き、仲間との生活を確かめ合いながら自己を育てていく。（図7）

両親教室のプログラム	
<p>①親同士・ピアグループ出会い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出会いと交流の場 ・親子関係を互いに知りあう場 ・親同士のピアサポートの場 <p>②親子教室参加の体験学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの遊び・集団参加・親離れ ・子どもの遊び・個性の観察 ・しつけ・生活習慣 ・父親・ファミリー参加日 ・父親教室と懇談会 <p>③体験的学びのプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親子遊びのDVD（親子関係） ・親子の会話を演じてみる ・父母の子育てに関する調査 ・養育態度としつけ調査 	<p>④親学習プログラムの利用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・0～2歳児のこころと身体の発達理解 ・生活環境と発達・個性 ・親役割についての学習 ・親子・家族関係についての学び ・生涯教育の学び （乳幼児から思春期を見通して） <p>⑤親のグループ活動・親の参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者になる・親子パーティー企画・運営 ・保育活動の補助・会報誌の編集・友の会 <p>⑥先輩親・専門家との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先輩親たちの子育てから学ぶ <p>⑦個別相談支援・専門機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達支援・親子関係支援

図4：両親教室・体験的学び

両親教室の支援者 (ファシリテーター)	相互役割連携	幼児教室の支援者 (保育者)
安心できる教室づくり	親子との	信頼関係づくり
共感的支援役割	共感的関わり	感覚・解放遊び 自宅にはない遊び環境 初めての友達関係
親をつなぐ役割	親子・親同士 子ども同士を	子どもをつなぐ役割
親の相談相手	つなぐ役割	発達段階に応じた 個別関わり
親の学びを支援する	↓ 保育ノート 保育記録 カンファレンス 相互役割調整	遊びを通しての発達支援 親との連携支援
体験的学習プログラム づくり・親学習の実施	↓ 親子の育ちを支援	↓ 保育発達支援
親子への個別支援		
子どもの発達支援 親子関係調整支援		

図5：支援者の役割（居場所づくり＋つなぐ人＋学びを支援する人）

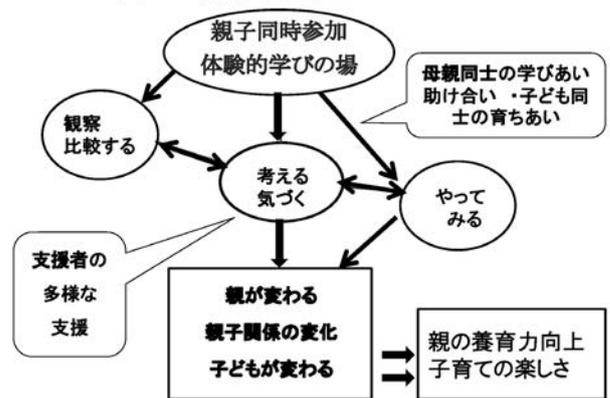


図6：体験的学びのプロセス

教室に参加した母親たちへのアンケート調査によると、心地良い居場所、信頼できるスタッフによる親子同時支援、保育の場を活用した親子の学びのプログラムの効果は大きい。その結果、親がリフレッシュして子どもと一緒に過ごす時間を楽しめ、親としての自信がつくようになったという。(図8)

親の成長・発達	子どもの成長
<p>●「親が育つこと」「親の自尊心が高まること」</p> <p>子どもを理解する力 →スムーズな親子関係 →親としての養育力 →効力感・自信 →子育てを楽しむ力→子どもの利益</p>	<p>遊ぶ力の発達 体を使った活動 意欲 情緒・心の安定</p> <p>自己表現力 人間関係力 言語・認知力</p> <p>生活の自立へ 仲間関係の広がり ↓↓ 意欲・効力感 →自信</p>
<p>●「家族・親子関係が確かなものとなること」</p> <p>→安定した親子・家族関係づくり →父親・母親の役割自覚と連携 →安定した夫婦関係→子どもの利益</p>	
<p>●子育てを「生涯学習の視野」で考えること</p> <p>子育て期は地域・社会活動への通過点 →地域の支援者に育つ親 (地域の育児力育てと次世代に繋ぐ場) →再就職する親・子育てと仕事の両立</p>	
<p>「子どもの自己が育つこと」</p>	

図7：親と子どもの成長

- ① 居心地の良さと気持ちのゆとり
 - ・親子が一緒に居心地がよかった
 - ・母親同士で語りあうことで気持ちが楽になったから
- ② 信頼できるスタッフの親子への細やかなサポート
 - ・親子双方にケア(親子同時支援)を受けられること
- ③ 子どもに仲間体験・親子の生活体験の広がりと保育の学び
 - ・同年齢集団の中で遊ぶ子どもを見て、発達や個性が分かったこと
 - ・親子遊びのプログラムや親子参加の行事に満足した
- ④ 親自身の楽しみと成長・親としての自信
 - ・親が楽しかったし、親の息抜きになったから
 - ・子どもと一緒に過し、一緒に遊ぶことが楽しくなった
 - ・親として自信が持てるようになった気がする

図8：参加した母親の感想についての4因子

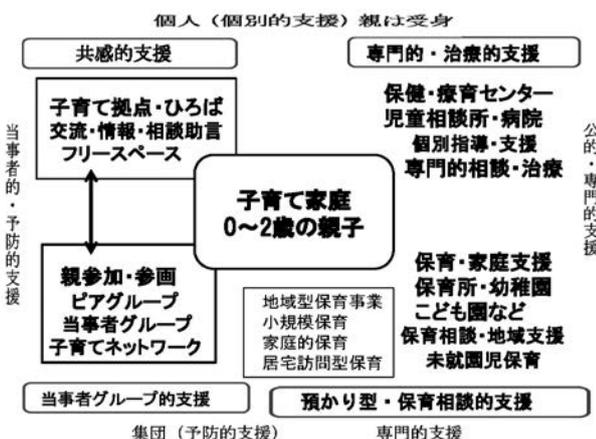


図9：多様な子育て支援の広がり

親の養育力向上支援のしくみ作りを

本来の子育て支援とは、“親の養育力を育て、親子がともに育つ環境を支援すること”である。40年にわたる親子教室の実践からの知見は、親の負担軽減をめざす支援だけでなく、親準備体験が困難な環境で育つ親たちに親子同時支援の場を用意し、親の養育力を高めることによって、子どもの健全な育ちと親子関係の安定を図る予防的支援の場が必要とされているということである。

専門的機関による個別相談や保育施設による保育相談支援の重要性は周知のとおりであるが、0～2歳の子育て当事者が最もアクセスしやすい地域の子育て支援拠点やひろば、地域の子育てグループ活動の取り組みは今なお発展途上である。他者の目が気になる現代の子育て当事者には、仲間同士や先輩親たち、地域のボランティアなどの非専門的支援者とのつながりがあり、身近な体験を素材にして気軽に話し合える体験的学びの場が必要である。そこでは、親を支援対象者と位置付けるのではなく、当事者である親の主体性と参加・参画を活かした「子育て当事者の予防的支援」の場を育て、当事者同士の体験的学びを相互に交流し学び合うしくみを作り、親子の活動を同時に支える支援者の養成が求められる。公的・専門的支援者は、予防的支援を目的とする当事者集団の学習活動を支援して、応援する存在であってほしいと思う。(図9)

(日立教育振興財団の教室は平成26年度で閉鎖しますが、その取り組みが支援に活かされることを願っています。)

〈参考文献〉

保育白書(2014) 全国保育団体連絡会・保育研究所編
「国民生活基礎調査」(2013) 厚生労働省
原田正文(2006)「子育ての変貌と次世代育成支援」名古屋大学出版会
中野由美子(2013)「子育て中の親と応援者への調査」つるみ子育て
子育てフォーラム報告書 子育て子育てフォーラム運営委員会
中野由美子(2005)「乳幼児との接触体験が子育てに与える影響」『家庭教育研究所紀要』27号 PP.40-49
日本小児保健協会(2011)「幼児健康度に関する縦断的比較研究」
日立家庭教育研究所(2009)「親と子が育ちあう「今」-30年を迎えた家庭教育研究所の実践活動から」財)日立教育振興財団
加藤邦子・飯長喜一郎(2008)「子育て世代応援します!-保育と幼児教育の場で取り組む「親支援」プログラム」ぎょうせい
角田春高(2014)「育て直し-問われる乳幼児体験」エイデル研究所

〈プロフィール〉

1978～1994 財)日立教育振興財団家庭教育研究所初代主幹研究員
1995～2012 目白大学短期大学・目白大学教員
2013～現在 目白大学大学院講師・聖心女子専門学校講師
横浜市子育て支援拠点NPOパレット理事